
ペルソナ3 リバース

ring

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナ3 リバース

【Nコード】

N5883J

【作者名】

ring

【あらすじ】

たとえば死を迎えてもアルカナの旅路は終わらない。
これは死から死、そして生誕から始まる物語。
ペルソナ3の再構成？です。

00 プロローグ『死神』（前書き）

はじめましてringと申します。

初投稿ですがよろしく願います。

誤字、脱字、感想、指摘などよろしく願います。

00 プロローグ 『死神』

足音が聞こえる……。

終わりと向き合ってから約二ヶ月間、ここまで耐えてきたが
もはや身体に力が入らない。

—もう、いいか…

アイギスしてくれている膝枕の感触と聞こえてくる足跡。

「泣かないで…」

と、最後の力を振り絞ってアイギスの頬に触れた。

「——、———。」

すでに言葉すらも聞き取れない。

そして眠気に耐え切れず目を閉じた。

声と共に近づいてくる足音がだんだんと大きくなり

ボタン!!

扉の開く音を最期に

一約束は

その意識を手放した。

一果たされた

アルカナシフト 『死神』 リバーズ

01 『死神』リバース

人は死を超える事は出来ない。

しかし、それでもアルカナの旅路は終わらない。

“命のこたえ”を得た彼の旅は、

まだ、終わらない。

2000年 9月 ムーンライトブリッジ橋上

そこは地獄だった。そこかしこに転がっている車と車を包み込むように燃えている炎。

そして、地面を濡らして広がっていく血、油。

対峙しているのは、『不完全な死』と『偽りの生命』。

地獄と化した橋の上には『不完全な死』とは別に幾つもの「確かな死」が存在していた。

予想を遥かに上回る『不完全な死』の力に『偽りの生命』、彼女は焦っていた。

これでは勝てないかもしれない。いや、勝つどころか相打ちすら危うい。自分自身の役割を全う出来ない。それは、人格を与えられた彼女にとって何よりも恐ろしい事であり、彼女の存在全てに関わる事であった。

焦る。しかし、彼女の力では倒すことはおろか、相打ちですら可能性は低い。

焦る。手段の一つに自爆を思いつく。一人の技術者が冗談半分に提案したが周りに却下されたとメモリーに残っている。そんな装置が付いていれば人格に支障をきたしかねないと実装されなかった。

しかし、今は実装を止めた技術者が恨めしい。自分に与えられた役割を全う出来ないことは死よりも恐ろしかった。

焦る。不意に視界に二つの影を見つけた。顔立ちが良く似ている二人の子供だ。恐らく兄妹だろうか、どちらも瀕死の状態らしく炎の中倒れ伏している。

その時、不意に思いつく。

—この兄妹を器に、『不完全な死』を封印する一と。

一瞬の葛藤の後、彼女は自己の役割、いや、存在を優先させた。

即座にオルギアモードを起動。

己が全力をもって『不完全な死』、デスへと向かっていった。

男の子に封印する。

女の子に封印する。<<

全てが終わる。自らの役割も、そして、活動も終わろうとしていた。全身の回路もほとんど焼ききれており、腕や足の関節もボロボロになっていた。

しかし、彼女は満身創痍だが戦闘らしい戦闘は起っていなかった。

『不完全な死』は生まれたばかりであり、攻撃を受けることはあっても殆ど自分から攻撃することは無かったのだ。彼が気まぐれに振った一撃が彼女に当たり大ダメージを与えたのだが、それ以外は攻撃らしい攻撃はしていなかった。

彼女が『不完全な死』を女の子に押し込み、封印するだけで満身創痍になったのだ。

—機能停止まで後30秒—

そう、自己判断しながら彼女—アイギス—は思う。
女の子に『不完全な死』を封印した事を後悔する。どう成長するにせよ、これからの彼女の人生は辛く厳しいものになるだろう。

男の子に『不完全な死』を封印しなかった事を後悔する。女の子は『不完全な死』を封印した事で持ち直したが、彼にはそれが無い。
ならば、その命は消えていくしかないのだから。

—機能停止まで後20秒—

後悔しているうちに男の子の生命反応が消えた。

あの男の子を弔ってあげたい。でも身体がもう動かない。

—私は機械なのに、なぜ、こんなにも心が痛いのか？—

「ごめんなさい…」

言葉と共に涙が流れた。

—機能停止まで後10秒—

不意に髪をなでられた。

「疲れただろう…?」

誰かも分からない人に髪を撫でられてるのだが、何故か心が落ち着いた。視覚機能が殆ど失われていてこの人が誰だか分からないのが悲しい。

ー機能停止まで後5秒ー

「今はゆっくり休んで。きっと、また、会えるから」

そつとパピヨンハートを触れられる。私の最も重要な機関、これを触られることは私にとって最も忌避すべき事。しかし、私に伝わるのは、今まで味わったことの無いほどの温もりだった。

その温もりの中、消えていく意識の最期に死んだはずの男の子を見た気がした。

アイギスが機能停止した事を確かめて、立ち上がり、周りを見渡した。

「ここは…、10年前なのか？」

自分でも殆ど覚えていない記憶。この場所と倒れているアイギスからして、ここはきっと10年前のムーンライトブリッジなのだろう。

だとすると、すでにデスはこの身に封印された後なのだろうか？

いや、そんな感覚はしない。十年間も共に在ったのだ間違えるはずも無い。

だとすれば……

と、自分の隣で眠っていた少女に『デス』の気配を感じた。

自分とよく似たこの少女に見覚えは無い、無いはずなのに何故か心が疼く。

—ズクン—

『……いちゃん』

—ズクン、ズクン、ズクン—

『…に…い…やん』

[illegible]

『待ってよ、おにいちゃん!』

「は……る……か」

そうだ、僕には有里遥歌＜ありさと＞はるか＞という妹が居た。
しかし、これまで過ごしてきた中で妹の姿は無い。

その瞬間、妹の中の『デス』の気配を思い出した。

今の妹の状態は重症だ。何とか持ちこたえているのは『デス』が宿主を生かそうとしているのだろう。

—前回妹は僕の代わりに死んでしまったのか。

「なら、次は僕が君を守ろう」

遥歌の髪を撫でながら決意する。

「これから僕が得るだろう、生活と絆を遥歌にあげる。
僕と一緒に居てあげる事は出来ないけど。離れていても、絆は消えないから」

我は汝…、汝は我…

汝、新たなる絆を見出したり

—『世界』のコミュニティが発生した—

少女の内なる声に少年は気付かない。

しかし、少年と少女の間には確かに絆が在った。

秘めたる絆と決意を胸に有里湊はタルタロスへと向かって歩き出した。

アルカナシフト 『死神』 リバース ⇒ 『節制』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5883j/>

ペルソナ3 リバース

2010年10月9日04時57分発行